令和 5 年 8 月 19 日
むすびらき読書会
北村透谷「心機妙変を論ず」（(勝本清一郎編『北村透谷選集』（岩波文庫）、1970）

●人生の「秘密」

「哲学必ずしも人生の秘奥を貫徹せず、何ぞ況(いは)んや善悪正邪の俗論をや。秘奥の潜むところ、幽邃(いうすゐ)なる道眼の観識を待ちて無言の冥契を以て、或は看破し得るところもあるべし、然(さ)れども我は信ぜず、何者と雖(いへども)この「秘奥」の淵に臨みて其至奥に沈める宝珠を探り得んとは。」
→「各人心宮内の秘宮」の内容を参照。

●文覚を明治文学界に紹介する星野天知

「むかし文覚(もんがく)と称する一傲客、しばしが程この俗界を騒がせたり。彼は凡(すべ)ての預言者的人物の如く生涯真知己を得ることなく、傲逸不遜磊落(らいらく)奇偉の一人物として、幾百年の後までも人に謳(うた)はれながら、一の批評家ありて其至真を看破し、思想界に紹介するものもなく今日に及びぬ。時なるかな、今年(こんねん)の文学界漸く森厳になりて、幾多思想上の英雄墳墓を出(いで)て中空に濶歩する好時機と共に、渠(かれ)も亦た高峻なる批評家天知子の威筆に捕はれて、明治の思想界に紹介せられたり。／天知君は文覚の知己なり、我は天知君をして文覚と手を携へて遊ばしむるを楽しむ、暗中禅坐する時、彼の怪僧天知君を訪(とぶ)らひ来て、豪談一夜遂(つひ)に君を起(おこ)して彼の木像を世に顕はさしむるに至りたるを羨(うらや)まず。わが所望は一あり、渠

が知己としてにあらず、渠が朋友としてにあらず、渠が裡面の傍観者として、渠の心機一転の模様を論ずるの栄を得む。」
→透谷は、星野天知による文覚賞賛を受けて、文覚における心機一転の模様を観察的に論じようとする。

●表向きの悪に被われた至善・表面的な善に被われた至悪

「蓮池に臨みて蓮蕾(れんらい)の破るゝを見るは、人の難(かた)しとするところなり。蓮華何の精あるかを知らず、俗物の見るを厭ふて幾多の見物人を失望せしむること多しと聞く。暁鴉に先(さきだ)ちて寝床を出で、池頭に立ちて蓮女第一回の新粧を拝せんとするの志あるもの、既に俗物を以て指目するに忍びず、然(さ)れども佳人何すれぞ無情なる、往々にして是等の風流客を追ひ回(か)へすことあるは。人間界の心池の中に霊活なる動物の、心機妙転の瞬時の変化も、或は蓮花開発に似たるところあり。／風静かに気沈み万籟(ばんらい)黙寂たるの時に、急卒一響、神装を凝(こ)らして眼前(めのまへ)に亢立(かうりつ)するは蓮仙なり、何の促すところなく、何の襲ふところなく、悠然泥上に佇立(ちよりつ)する花蕾の、一瞬時に化躰して神韻高趣の佳人となるは、驚奇なり、然(しか)り驚奇なり、極めて普通なる驚奇なり、もし花なく変化なきの国あらば、之を絶代の奇事と曰はむ。絶代の奇事にして奇事ならざるもの、自然の妙力が世眼に慣れて悟性を鈍くしたるの結果とや言はむ。」
→人間の心機は自然界のものとは異なり、極めて気付きにくい上に一瞬の変化であるが、通常の善悪の裏側にある至善ないし至悪は極めて見極め難いが、その「電光一閃の妙変」こそ真に興味を向けるべき所である。心の中に暗黒と光明の乱戦が見られることこそ人間の人間たる所以である。

●人間の内なる二つの本性

「神の如き性、人の中にあり、人の如き性、人の中にあり、此二者は常久の戦士

なり、九竅(きうけう)の中(うち)にこの戦士なければ枯衰して人の生や危ふからむ。神の如き性を有(たも)つこと多ければ、戦ひは人の如き性を倒すまでは休まじ、休むも一時にして、程経(ふ)れば更に戦はざる能はず。人の如き性を有(たも)つこと多ければ終身惘々(まう〳〵)として煩ふ所なく、想ふ所なく、憂ふる所なからむ。この両性の相闘ふ時に精神活きて長梯を登るの勇気あり、闘ふこと愈(いよ〳〵)多くして愈激奮し、その最後に全く疲廃して万事を遺(わす)る、この時こそ、悪より善に転じ、善より悪に転ずるなれ、この疲廃して昏睡するが如き間に。」
→真に高遠なるものは「石火中の大頓悟」である。

●文覚とは？
「生没年未詳。平安末～鎌倉初期の僧。俗名遠藤盛遠 （えんどうもりとお)。摂津の渡辺党の遠藤茂遠（もちとお)の子。初め上西門院（じょうさいもんいん）に仕えたが、同僚の源渡 （みなもとのわたる）の妻袈裟 （けさ）に恋慕し、誤って彼女を殺したのが動機で出家し、諸国の霊場を遍歴、修行した。文覚は空海（くうかい）を崇敬し、1168 年（仁安 3）その旧跡である神護寺 （じんごじ）に住み、修復に努めた。1173 年（承安 3）後白河 （ごしらかわ）法皇の御所法住寺 （ほうじゅうじ）殿を訪ね、神護寺興隆のために荘園 （しょうえん）の寄進を強請して伊豆 （いず）に流され、そこで配流中の源頼朝 （よりとも）に会った。1178 年（治承 2）許されて帰京したが、流されてのちも文覚は信仰の篤い法皇への敬愛の情を失わず、翌 1179 年、平清盛 （たいらのきよもり）が法皇を幽閉したのを憤り、伊豆の頼朝に平氏打倒を勧め、1180 年には平氏追討を命ずる法皇の院宣 （いんぜん）を仲介して、頼朝に挙兵を促した。1183 年（寿永 2）法皇から紀伊 （きい）国桙田荘 （かせだのしょう）を寄進されたのをはじめとして、法皇や頼朝から寺領の寄進を受け、神護寺の復興に努力した。1190 年（建久 1）には神護寺の堂宇はほぼ完成し、法皇の御幸を仰いだ。文覚はさらに空海の古跡である東寺 （とうじ）の復興をも図り、1189 年（文治 5）播磨 （はりま）国が造営料国にあてられ、文覚は復興事業を主催し、1197 年には諸堂の

修造を終えた。しかし 1192 年に法皇が没し、1199 年（正治 1）に頼朝が没すると、文覚は後援者を失い、内大臣源通親 （みちちか）の策謀で佐渡に流された。1202 年（建仁 2）許されて帰京したが、後鳥羽 （ごとば）上皇の怒りを買い、翌 1203 年、さらに対馬 （つしま）に流され、やがて没した。」
[上横手雅敬]2017 年 10 月 19 日］（日本大百科事典）
→袈裟御前
「「源平盛衰記」に登場する源渡(みなもとの-わたる)の妻。
従兄(いとこ)の遠藤盛遠(もりとお)(のちの文覚(もんがく))に横恋慕されてなやみ,みずからはかって盛遠に殺される。このため夫の渡も盛遠も出家したという。この説話は江戸時代,浄瑠璃(じょうるり)や歌舞伎の題材となった。名は阿都磨(あとま)。」
→袈裟御前の母は衣川殿であるが、幼い頃に両親を亡くした盛遠は叔母である衣川殿に養われていた。尚、渡と盛遠は同じ摂津源氏の渡辺党である。
→文覚が袈裟御前の菩提を弔うために建てたとされるのが伏見区下鳥羽にある浄土宗の寺院、恋塚寺である。

●文覚の袈裟への恋愛に対する評価

「文覚の袈裟(けさ)に対するや、如何(いか)なる愛情を有(たも)ちしやを知らず、然れども世間彼を見る如き荒逸なる愛情にてはあらざりしなるべし。当時夫婦間の関係を推(すゐ)するに、徳川氏時代の如く厳格なるべきものにあらず、袈裟の如き堅貞の烈女、実際にありしものなりや否やを知らず、常磐(ときは)の如き、巴(ともゑ)の如き節操の甚だ堅からざる女人(をんな)多き時代にありて、袈裟御前なるもの実際世にありしか、或は疑ひを挿むの余地なきにあらず。然れども凡てのドラマチカルの事蹟を抹殺し去りても、文覚が其妄愛に陥りし対手を害せし事は事実なるべし。文覚が世に伝説するが如き驕暴なるものにあらずとするも、少なくとも癡迷惑溺(ちめいわくでき)の壮年たりしことは許諾せざるべからず。」

→常盤は源義朝の側室で阿野全成、義円、源義経の母（後に一条長成に嫁ぎ、一条能成を産む。『平治物語』『平家物語』では平清盛に請われて妾になったとされる）、巴は木曾義仲に仕えた女武者でその妾とも言われる（『源平盛衰記』では鎌倉へ落ち延びた後で和田義盛に嫁ぎ、朝比奈義秀を産んだともされる）。
→透谷は袈裟のような貞女が平安末期に存在したかどうかは疑っているが、文覚と袈裟の話の実在性を疑っておらず、その上で文覚を惑う人としている。

●誤って袈裟を殺害する時の文覚の心境

「渠(かれ)は「油地獄」の主人公の如く癡愚無明なりしものなるか。余は、しかく信ずること能はず。彼の文、彼の識、世間の道法を弁ぜざるものとは認め難し。然(さ)れども渠は迷溺するを免かれざりしなるべし、彼の本地は世間の道法に非ず、世間の快楽にあらず、世間の功利にあらず、進取にあらず、退守にあらず、全然一個の腕白むすこたりしなるべく、何物にか迷ひ何物にか溺るゝにあらざれば、遂に一転するの機会は非ざりしなり。渠は凡(すべて)のものを蔑視したるなるべし、浄海も渠を怖れしめず、政権も渠を懸念せしめず、己れの本心も渠を躊躇(ちうちよ)せしむるところなく、激発暴進、鉄欄(てつらん)の以て繫縛する者あるに至るまでは停駐するところを知らざるなり。／渠は悪を悪とするを知る、然(さ)れども悪の悪なるが故に自(みづか)ら制止することは能はず、能はざるに非ず、するの意志を有せざるなり。善の善なることを知る、然(さ)れども善の善たるを知りて之を施(ほどこ)すことは能はず、能はざるに非ず、施すの念を有(たも)たざるなり。彼の一身は一側より言へば、わんぱくなり、他の一側より見れば頑執なり。人の婦(ふ)なることを知りて之を姦せんとす、元より非道なり、然(さ)れども彼は非道を世人の嫌悪する意味に於ての非道とせず。人

を己れの慾情の為に殺害するの悖虐(はいぎやく)なるを知る、然(さ)れども悖虐を悖虐とする所以は極めて冷淡なる意味に於てなり。故に彼は此大悪を犯さんとする時に、左転右(さてんうへん)せず、白刃を睡客に加ふるの時に於てすら、彼はなほ大悪の大悪たるを暁知せざるなり。」

→「油地獄」は斎藤緑雨（1867-1904）が明治 24 年（1891）に書いた小説。柳橋の芸妓小歌に惹かれ、不義理な借財をして通い詰めるが、小歌が資産家の旦那に落籍されることで、やがて狂気に陥る地方出身の青年貞之進の姿を描く。

→「浄海」は平清盛の出家後の戒名。

●文覚に「妙変」を与えたのは袈裟を殺害したことである

①「彼は此の際に於て、天地の至真を感ぜし事其一なり。凡(すべ)てのものを蔑視したる彼は今、女性の真美を感得せり、血肉あるの女性は血肉の美を示せども、天地の至妙を示すものにあらず、始め貞操を以て辞せしものも、人間を嘲罵する彼の心絃には触れざりしを、この際に於て豁然(くわつぜん)悟発して、人間に至真の存するあるを暁(さと)らしめたり。」

→貞節を守って死ぬ至真の感得

②「彼はこの際に於て、己れの意中物を残害すると同時に、己れの迷夢をも撃破し了れり。彼の惑溺は袈裟ありて然るにあらざりしも、この袈裟の横死は彼が一生の惑溺を医治したり。意中物は己れの極致なり、己れの極致を殺したる時に、いかで己れの過去を存することを得む。彼は極致と共に死したり、而して他の極致を以て更生するまでの間は所謂(いはゆる)無心無知の境なり、激奮猛奔して、而して中奥に眠熟(みんじゆく)するが如き境なり、この境を過ぐるは心機一転に欠くべからず、而してこの境は石火なり、流星なり、数秒時間なり。この数秒時間の後に、他の極致は歩を進めて彼の中(うち)に入る、しばらく混乱したる後に彼は新生の極致を得て、

全く向前の生命と異なるものとなるなり。」

→一生の惑溺を破ることによる生まれ変わり

③「彼はこの際に於て天地の実を覚知せり。「死」、彼に於て何の恐るゝところなく、生、彼に於いて何の意味あるかを知らしめず、茫々たる天地、有にもなく無にもなきに似たる有様にありしものが、始めて「死」といふ実を見たり。死は永遠の死にして、再見の機あらざるべき実を知りたり。無常彼に迫りて、無常の実を示し、離苦彼を囲みて、離苦の実を表はし、恋愛その偽装を脱して、恋愛の実を顕はし、痴情その実躰を現じ、大悪その真状を露はし、彼をして棘然として顛倒せしめ、然る後に彼をして始めて己れの存立の実なると天地万有の実なるとを覚知せしめたり。而して彼をして天地神明に対して、極めて真面目なるものとならしめたり。」

→天地の実である諸行無常の覚知

④「彼はこの際に於て、恋愛の至道と妄愛の不義とを悟れり。曩に愛慕したるもの真の愛慕にあらず、動物的慾愛に過るところあらざりし。然れども事の茲に至りて、始めて妄執の妄執たるを達破し、妄愛の纏したるを頓脱し、恋愛の方向一転して、皮膚の愛慕を転じて内部精神の美に対する高妙なる愛慕を興発せり。この愛慕は一の目的物に聚りて、而して四散せり、四散せるもの再た聚りて或一物の上に凝れり、彼の以後の生涯、是を証するを見るべし。」

→動物的欲望から来る妄愛からの、内部精神の美への愛慕としての恋愛の区別

⑤「最後に彼は此際に於て仏智を得たり。彼は無慚、無愧、無苦、無憂にして、百煩悩の繁擁するところとなりて、自ら知ること能はざりしなり。然るに発露刀一たび彼の心機を断截するや、彼は自ら依怙するところを喪ひたり、仏

智はこの一瞬間に彼の中(うち)に入り、彼をして照明の心鏡に対せしめ、慚愧苦憂、輾転煩悶せしめ、然る後に自己を寄するところを知らしめたり。」
→仏の悟り

●心機妙変後の文覚の境地

「噫(あゝ)この、ある意味に於ての荒法師が、筐中(きやうちゆう)常に彼可憐の貞女の遺魂を納めて、その重荷を取り去ることを得ざりしと、懸瀑に難行して、胸中の苦熱鎖(とざ)し難き痛悩とは、豈(あに)生(なまざと)悟りの聖僧の能く味ふを得るところならんや。」
「文覚が袈裟を害したるは実に彼の心機を開発したるものなり、蓮花蕾を破りて玉女泥中に現れたるは、実にこの晨(あした)なり。至善の至悪を仆(たふ)したるもこの朝(あした)なり、無漏の有漏に勝ちたるも、光明の無明を破りたるも、神性人性を撃砕したるも、皆この時に於てありしなり、而して其時間は一閃電の間に過ぎず、人終(つひ)に戦はずして勝つ能はざるか、仆れずして起(おき)る能はざるか、われは文覚の為に悲しむ、われは彼の発機(はつき)を観じて、彼の為に且つ泣き且つ喜ぶ、彼をして斯(かく)の如き大毒刃の下に大発心を得せしめたる神意、果して如何(いかん)。」
→誤認による袈裟御前の殺害という大毒牙の至悪による文覚の心機妙変による大発心の至善を透谷は貴重なものとし、唯一人無私の精神で神護寺の復興に志し、全盛の平家を倒すことを頼朝に勧めたその後の文覚の生涯がそこから導かれたものとしている。